

朝顔巻とは、源氏的心情に關していえば、六条院世界の完成のために不可欠な、紫の上の「据え直し」を語った巻であるの同時に、その「据え直し」には六条院世界の崩壊の芽をもが内包されていることを語った巻であるといえるだろう。

そしてこのことは、朝顔の姫君のような、物語の要請にそつて人物造形が行われる脇役的人物に対し、源氏の場合は、「藤壺を慕い続ける」という彼の人物造形によって、物語が展開させられていくという、源氏物語第一部における方法を端的に示しているものだといえるのではないだろうか。

注

- (1) 三田村雅子・河添房江・松井健児編集 源氏研究 1996・4
(2) 森藤(旧姓福田) 侃子 「権斎院について」

秋山虔 「紫上の変貌」 国文学 1964・5
東京都立大文学部 1963・3

- (3) 坂本和子 「朝顔斎院」論——賀茂の伊都伎女——
国学院雑誌 1970・7

- (4) 源氏物語の本文引用は全て小学館『日本古典文学全集』による。
(5) 川崎昇 「源氏物語の背景——朝顔の君をめぐる——」

- 国学院雑誌 1969・12
(6) 注1前掲書

- (7) 注1前掲書 三田村雅子「黒髪の源氏物語」

- (8) 「朝顔の宮、さばかり心強き人なめり。世にさしも思ひ染められながら、心強くてやみたまへるほど、いみじくこそおほゆれ。空蟬も。それもその方はむげに人わろき。後に尼姿にて交らひあたる、

また心づきなし」(小学館完訳日本の古典『無名草子』)

- (9) 後藤祥子 「藤壺の出家」『源氏物語の史的空間』
東京大学出版会 1986

- (10) 吉岡曠 「鶯鶯のうきね」 中古文学 1974・510
川島絹江 「紫の上の和歌——『源氏物語』の和歌の機能——」
『日本古典文学の諸相』 勉誠社 1997

- (11) 平成八年度国学院大学公開講座にての指摘
(付記) 本稿は平成九年度日本女子大学国語国文学会春季大会における口頭発表をもとに補筆改訂したものです。

皇女総覧(八)——桓武皇女(大宅・賀楽・菅原・池上内親王)、嵯峨皇女(源潔姫)——

皇女研究会

大宅内親王・賀楽内親王・菅原内親王・池上内親王

あらゆる氏族の女性たちが集う桓武天皇の後宮に、橘氏もまた三人の女を入内させていた。

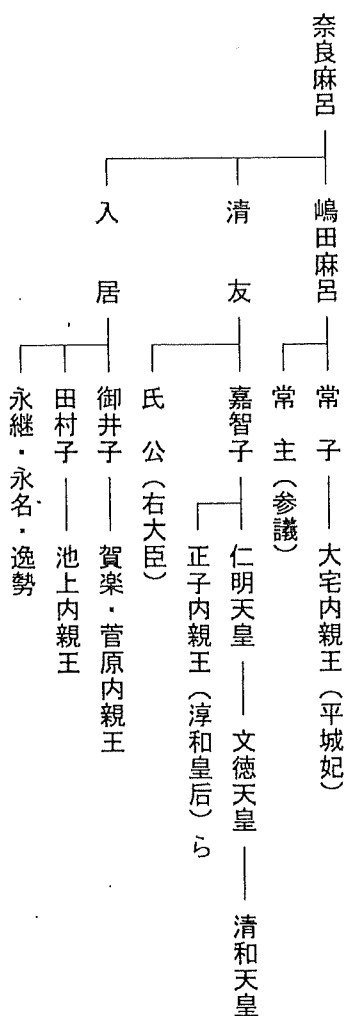
橘氏は敏達天皇三世の美努王の妻・県犬養宿禰三千代がその功によって与えられた橘宿禰姓を、子息の葛城王・佐為王が臣籍降下する際に継承することを許され、橘宿禰諸兄・同佐為と称したことに始まる。天平九年(七三七)の天然痘の流行による藤原四卿の急死にともなう大納言に昇進した諸兄は、翌年の安倍内親王(後の孝謙天皇)立太子と同時に右大臣となって政権の中樞に位置した。「藤原四子が薨去したこの時にあっては、天皇ないし皇后が国務を諸兄に委ねたのは至極当然」(注1)というのも、諸兄が光明皇后の同母兄という由縁による。天皇の信頼も厚かったようで、やがて正一位左大臣にまで上り、朝臣姓を賜っている。が、弟の佐為を天平九年に失っていたこともあり、橘氏は諸兄以外に公卿として廟堂に顔を並べる人材に

欠けた。つまり橘氏の権勢は、諸兄独りの双肩に掛かっていたのだが、「温和な人物で、いわゆる強烈な性格の持主ではなく、また才知にたけた敏腕家でもなく、諸氏族に妥協的」(注2)だったが故にやがて藤原氏、殊に仲麻呂の台頭を許してしまう。諸兄は左大臣にありながら次第に影の薄い存在となり、天平勝宝八年(七五六)にはやむなく致仕に追い込まれ、翌年失意のうちに薨去した。諸兄の子・奈良麻呂は、仲麻呂に反発する皇族系貴族を中心とした不満分子をかねてから糾合していたが、道祖王の廃太子と大炊王(後の淳仁廃帝)の立太子を契機とした皇位継承の不安定につけ込んで政権の奪取を謀ろうとした。しかし、仲麻呂の優位は既に決定的段階ということもあって密告者が相次ぎ、謀略は未然に発覚して奈良麻呂は捕らえられ、獄中死を遂げたらしい(注3)。この橘奈良麻呂の乱の失敗によって藤原仲麻呂は完全に政権を掌握し、逆に橘氏の勢威は急速に衰えた。

それでも後の藤原北家のような絶対的優位を確立した氏

族はなく、全氏族の長として君臨する天皇の政策の一翼を担う象徴として集められた多種多様な出自の皇妃の中に、橘氏は嶋田麻呂女の常子、入居女の御井子・田村子姉妹を送り込んだ。その背景には、入内、ひいては橘氏腹の皇子女の誕生が氏族としての勢力を多少なりとも取り戻す足掛かりになれば、という願望も込められていたと思われる。嶋田麻呂も入居も父が奈良麻呂ということが響いたか、最終的に従四位下に叙せられるのがやっとという状態で、女たちを入内させたころは、それぞれの官位はもっと低かった

たことが充分に察せられる。心細い後見に三人も大きな野心は抱きようがなかったと思われ、しかもそれぞれの皇妃の産んだ子はみな皇女であった。皇子に比べて成婚率が低いために権門と結びつく可能性も薄く、その方面から氏族を盛り立てる要素には欠けた。橘氏を母とする内親王は四人。大宅内親王は常子の、賀楽・菅原内親王は御井子の、池上内親王は田村子の所生（注4）である。



大宅内親王は延暦二十年（八〇二）に加笄し（注5）、やがて東宮妃として安殿親王（後の平城天皇）に入内した。既に東宮妃となっていた異母姉の朝原内親王を牽制する意味合いがあったと思われる（注6）。朝原内親王は天智系

皇統の父・桓武天皇と天武系皇統の母・酒人内親王との間に生まれ、東宮の後宮の中でも群を抜いて尊貴の血筋であった。この朝原内親王に皇子が誕生して登極するようなことになれば、それは天皇親政の可能性を生じることとなり、

政治の覇権を狙う貴族にとっては歓迎すべからざる事象となる。東宮には有力氏族出身の皇妃がないことからその不安は深刻で、少なくとも朝原内親王より早く皇子を儲けることをある程度期待され、東宮に対する精神的圧力として、外戚を橘氏に持つ大宅内親王と、同じく外戚を藤原氏に持つ甘南備内親王が東宮妃に送り込まれたのではない。御井子・田村子腹の内親王が東宮妃に選ばれていないことから、おそらく、常子は橘氏の皇妃の中で最も早く入内し、大宅内親王は他の橘氏腹の皇女よりも年長であったことがうかがわれる。

加笄の年、大宅内親王は十二から十四歳程度であろう。内親王の叔母に当たる橘嘉智子はこのとき十六歳。既に神野親王（後の嵯峨天皇）の妻となっていたのかどうかは不明だが、いずれにせよ、大宅と嘉智子の二人が橘氏浮上の鍵を握っていたことになる。嘉智子は幼少時に父・清友を失っていたから、彼女を後見し、神野親王との結婚の便宜を図ったのは嶋田麻呂であったと考えられる（注7）。清友は奈良麻呂の乱の翌年に生まれて父の罪にいささかも関わらなかつたから、その女・嘉智子は将来の皇位継承者と目される有力皇子に配するのに最適だったのである。あるいは嘉智子と神野親王との結婚を視野に入れて、嶋田麻呂は他の誰でもなく、自分の女・常子腹の大宅内親王を東宮妃にしたものであろうか。橘氏の閥房戦略における大宅

と嘉智子の関係の近しさから、嶋田麻呂と清友は同母の兄弟かとも思われる。後のことになるが、大同二年（八〇七）には入居の男・永継が伊予親王謀反に連座したとされて一時失脚し、承和九年（八四二）の承和の変では同じく入居男・逸勢が流罪、永名が解任されている。双方の事件とも、橘氏の浮沈に影響はなかったものの、逆に言えば、それが嶋田麻呂・清友兄弟と、入居の生母が異なっている証明のように思える。

さて、大宅内親王は東宮妃として送り込まれたものの、周知のように大同元年（八〇六）に即位した夫・平城天皇はその皇后位を亡き藤原常子に贈り、また大同四年四月には皇位を降りてしまふ。讓位直後の七月に「大宅内親王第」の火災の記事があることから（注8）、内親王は上皇となった夫の許を離れ、後宮を退出していたものであろうか。また、理由は定かではないが、弘仁三年（八一二）五月には、朝原内親王が（注9）、十日遅れて大宅内親王も職を辞している（注10）。弘仁八年（八一七）には、大宅内親王は生母と永別（注11）、天長五年（八二八）には出家を遂げた（注12）。政治的な関わりを持たない大宅内親王の身辺は華やきには欠けたであろうが、参議となっていた叔父の常主の存在もあり、生活に困るようなことはなかったと思われる。この後、彼女の記事は薨伝までない。その薨伝で、大宅内親王は無品とされている（注13）。

しかし妃を辞するとき四品、母の死と出家に際し三品と記述されたことから、記録に混乱が生じていることが分かる。既に過去の人として忘れられた存在となりつつあったのであるうか。時代は仁明天皇、嘉智子の産んだ皇子の代である。橘氏は外戚として昔日の輝きを取り戻していた。

他の橘氏所生の皇女たちについては、父・桓武天皇と船遊びをし(注14)、嘉智子腹の正子内親王が立后した十日余り後四品(注15)、承和の変の三年後に三品に叙せられた(注16)御井子所生の賀楽内親王の記事が散見する以外、全て薨伝である。桓武天皇の子・淳和天皇の代に薨去した菅原内親王(注17)以外は「天皇不視事三日」と記録された。池上・賀楽内親王は清和天皇の代にその生涯を終えている(注18)。既に桓武天皇の時代は遙か遠く、橘氏の栄光も再度失われて久しかった。

(注1) 高島正人『奈良時代諸氏族の研究』昭和五十八年／吉川弘文館

(注2) (注1)に同じ

(注3) 『尊卑分脈』には「被誅」の文字が見えるが、『続日本書紀』に奈良麻呂の処罰に関する記述はない。が、奈良麻呂以外の乱の中心人物である黄文王・道祖王・大伴古麻呂・小野東人・多治比積養・賀茂角足らは拷問によって死亡したとある。

乱の首謀者であったことを考えると、奈良麻呂は捕らえられて間もなくの早い時期に死亡したと思われる。

(注4) 『本朝皇胤紹運録』では賀楽・菅原・池上内親王は御井子の所生となっているが、『三代実録』に拠れば池上内親王は田村子の所生である。ここでは『三代実録』に従った。

(注5) 『日本紀略』延暦二十年十一月九日条

(注6) 皇女研究会「皇女総覧(一)」朝原内親王の項(一文字昭子)／『国文目白』第三十三号／平成六年一月

(注7) 嶋田麻呂の没年は不明だが、『尊卑分脈』に見える他の奈良麻呂男のうち、清友は延暦八年(七八九)に、入居は同十九年(八〇〇)に既に薨去している。

(注8) 『日本紀略』大同四年七月六日条

(注9) 『日本後紀』弘仁三年五月十六日条

(注10) 『日本後紀』弘仁三年五月二十六日条

(注11) 『日本紀略』弘仁八年八月一日条

薨年三十歳と記されるが、逆算すると常子は当時嵯峨天皇夫人である従姉妹の嘉智子より二歳ほど年少で、所生の大宅内親王がが加笄したときに十九歳だったことになってしまい、それは

あり得ない。薨伝の「卅」は「卅」の誤記であると考えられる。

(注12) 『日本紀略』天長五年十一月二十五日条

(注13) 『続日本後紀』嘉祥二年二月十四日条

(注14) 『日本後紀』延暦二十三年十月十二日条

(注15) 『日本紀略』天長四年三月八日条

(注16) 『続日本後紀』承和十三年一月八日条

(注17) 『日本紀略』天長二年閏七月六日条

(注18) 池上内親王薨去『三代実録』貞観十年十一月二十三日条

賀楽内親王薨去『三代実録』貞観十六年二月三日条
(柳澤 理恵子)

源潔姫

弘仁五年(八一四)五月、嵯峨天皇の皇子女八人が賜姓された(注1)中に潔姫も入っていた。母は当麻氏の女で、同母妹の全姫も同時に賜姓されている(注2)。翌年左京一条に貫附属された時(注3)に六歳とあるので、逆算すると弘仁元年(八一〇)に生まれたことになる。

賜姓された八人のうち皇女は四人である。皇子の賜姓は

それ以前にもあったが、皇女についてはこれが初めてであった。さらに潔姫と貞姫が六歳で、他の二人より年長者である。

後に嵯峨天皇は、当時はまだ無位の蔵人だった藤原良房の将来を見込んで潔姫を彼の妻に配した(注4)。潔姫と同年令の貞姫の母は、布勢氏の女で、布勢氏は安倍氏の末裔である。どちらも当時にあつては特に勢力のある氏族ではなかったものの、臣下の氏族である安倍氏よりは、王族の末である当麻氏の方が格式が高かったための配偶と考えられる。またこの当麻氏の女が、潔姫と全姫の二人の皇女を生んでいることから、嵯峨天皇の寵愛がより深く、その子にもよりよい境遇を与えたかったという配慮もあったといえよう。事実、潔姫が良房に配されたことで、この姉妹の生涯は他の賜姓皇女とは格段の差を見るのである。

潔姫と良房の子・明子が天長五年(八二八)に生まれているところから、二人が結婚したのは天長三十四年頃と想像できる。皇女で賜姓されたのも初めてなら、皇室から見れば臣下である藤原氏に配されたのも初めてであった。

継嗣令により、内親王の結婚相手は天皇か四世以上の王と定められている。そのため院政期になると生涯独身の内親王が増えたのであるが、潔姫の場合は賜姓されたことで「内親王」ではなくなり、その特権も失う代わりに、この制約からも解放されたのであった。

皇女の結婚については坂井潔子氏の「内親王史序説」(注5)や今井久代氏の『皇女の結婚』(注6)において詳しく考察されているが、相手は近親に限ることと皇族の血統の聖別を保証し、ひいては王権を保証するとともに、皇統の交代においては、断絶する系統の皇女を妃とするこゝとでそれを取り込んでいくという機能を果たしていた。だが後には有能な後見(藤原氏)とのつながりを強めるために皇女を降嫁させるケースが生まれ、潔姫はまさにその転換期の第一番目だったのである(後の醍醐天皇の時に成ると内親王の降嫁も出現した)。

もともとは皇子の増加による皇室財政への圧迫をなくすために賜姓ということが始まり、皇女においてもそれは同じであったが、賜姓されることで潔姫のように他氏族との結婚によりきずなを強めたり、潔姫の妹・全姫のように官職について宮廷を助けたりと、様々な道があらわれてきた。その根本となる二つの制度(賜姓と降嫁)が嵯峨天皇によって始められ、それを体現したのが潔姫だったと言えよう。だが嵯峨天皇の計画は、彼の思惑通りには進まなかった。弘仁元年(八一〇)の皇子の変後、権力を一手にした嵯峨天皇は次の天皇に弟の淳和をたて、さらに自らの第一皇女である正子内親王を淳和の皇后とした。正子内親王には霊的な逸話も伝わっており、王位を継承する血筋として、嵯峨天皇が期待していたことが推察される。また淳和天皇が

即位すると、淳和と正子の子・恒貞親王を、本人の再三の辞退にも係わらず、ほとんど強引に立太子させたのも嵯峨天皇である。

一方で嵯峨天皇は潔姫と良房を結婚させており、これは良房の父・冬嗣が嵯峨天皇の皇太子時代からの信任あつた実力者であると同時に、良房自身に期待するところが大きかったことは文徳実録にも記事(注7)がある。また冬嗣の女・順子は嵯峨の皇子の正良親王(後の仁明天皇)に嫁しており、嵯峨皇統と藤原北家はここで二重の縁組みをして連帯し、利益を共有したのだった。

嵯峨帝の意向は、恒貞親王に皇位を渡し、その後見を藤原北家にさせようというものだったのではないだろうか。だが嵯峨帝の死の直後、良房と嘉智子は承和の変により恒貞親王を廃し(注8)、嵯峨系の天皇と北家が天下を掌中にした。

承和の変以降の良房の動きは、その後の藤原氏と天皇家の位置関係(注9)を象徴している。藤原氏が女を入内させ、天皇は皇女を降嫁させることで、両者の地位は安定するが、それによって皇親の地位は低下し、両者の権威も共に下がっていくのである。

そしてこの時に潔姫が良房の妻であったことが、良房の力をより強め、嵯峨帝の思惑と正反對の方向に作用したのだった。皇室と後見者のきずなとしての皇女の降嫁が、藤

原氏の権威をさらに上げてゆくものとして通例になったのも、潔姫を嚆矢とするのである。

それだけに、良房が潔姫を大切にし、厚遇したであろうことは疑いない。二人の間には明子一人しか生まれていないが、他に良房の子を生んだ女性の記録はなく、公式には生涯一妻だったことから、潔姫への最高級の配慮が伺われる。

承和八年(八四一)に潔姫は正四位下になった。しかしこの時の直接の動機は不明である。同時に他に五人がいずれも四位、五位に昇進しており、その中には潔姫の母と同族で後に尚侍となった当麻浦虫もいたが、特別にこれらの昇進を結びつけるものは見当たらない。それより以前の承和元年に、良房は参議となり、翌二年にはかの七人ぬきで権中納言となつてはいるが、それから六年も経っているのに、タイミングとしては、これも潔姫の正四位下昇進とはつながりにくいであろう。

承和九年には嵯峨上皇崩御と承和の変が続く、良房は同母妹の順子所生の文徳が皇太子になったことで一段と力をつける。嘉祥元年(八四八)には右大臣、翌二年には従二位となった。同三年には明子が清和を生み、仁明天皇の急死、文徳の即位、清和の立太子と慌ただしいばかりに良房は権力を掌握していった。清和が生まれてすぐに立太子されたのも、良房の力と同時に、祖母である潔姫の血統が大

いに効力を発揮したと考えられる。だがこの間、潔姫については一切記録はない。清和立太子の時点でも、潔姫は正四位下のままである。中心人物はあくまで良房と明子なのである。

仁寿元年(八五一)、良房は正二位に、潔姫は従三位に昇進した(注10)。これは近い将来、明子が皇太夫人になるための布石と見られる。従三位以上でないと参内できないので、明子が従三位になるためにもまず母である潔姫が昇進したのである。

仁寿三年、正月に明子が布石通り従三位に、三月には潔姫が正三位に昇進した(注11)。ここでも明子に合わせ、ての昇進のようにも見られるが、直接の動機はその前の月すなわち二月の晦日に、文徳天皇が冷然院に幸じた帰途、良房邸へ桜の花見に行幸して「酒興楽」のもてなしを受けた(注12)ことにある。その褒賞として家人にも恩がおよんだ(注13)と記録にある。良房自身の昇進はこの時にはなかったが、花見の当日に禄を賜っている。

さて良房・明子の栄華の実現はここから始まるのだが、その前の斉衡三年(八五六)、潔姫は四十七歳で亡くなつてゐる。潔姫の生前の記事は結局、賜姓皇女として藤原氏と初めて結婚し、明子を生んだということに尽きるのであつて、その死期も、まるで役割を終えた者が次の場面の始まる前に消えたかのようである。薨伝によれば(注14)、

琵琶をよくしたとあり、わずかに人柄をしのばせていよう。
亡くなった当時は白河の地の賀楽岡というところに埋葬されたが、後の天安二年（八五八）十一月には、その年に即位した帝（清和天皇）の祖母として正一位を贈られ（注15）、翌十二月には山城国愛宕郡の愛宕墓に移された（注16）。これも天皇の祖母として、より権威ある場所に改葬したということであろう。

さらに貞観元年（八五九）五月には墓守の家を一戸定められ（注17）、同五年には墓の周囲四町四方が墓所として定められた（注18）。いずれも改葬と同じ動機であると推察できる。

また良房の死後の元慶元年（八七七）には藤原鎌足・潔姫・良房・長良および長良の妻の五人の墓に「荷前幣」を献じることを定めており（注19）、それは同八年に再び確認された（注20）。他に功績のなかった長良夫妻が加わっているところからして、元慶元年のことは陽成天皇が即位したことに関連すると思われる。

良房亡きあと、その後継者として甥で養子の基経が藤原北家の力を及ぼした結果が、陽成天皇の即位である。これを機会に、天皇の外戚としての藤原氏を厚く祀ると同時に、さらにその前代にまで皇を及ぼしたものであるう。

そして自らが後押しをして即位させた陽成天皇を廃して、新たに光孝天皇をたてたことで、基経が更に勢力を不動の

ものにした（注21）のが、元慶八年である。この時は、天智天皇や光仁天皇、藤原乙牟漏にはじまる十陵五墓がこの指定を受けており、皇祖をとりこみつつ、外戚北家の権威づけを墓制の整備という側面からも計ろうとした、基経の遠大な政治的意図をうかがうことができる。これによって他氏族に対しての優位を決定づけるだけでなく、藤原氏の内部にあっても、北家が一族の中心であると認めさせることになったと思われる。

潔姫の生涯は、嵯峨天皇の配慮により良房に配されたことで、内親王を含めた他の皇女と比べて格段に恵まれたものになった。だがそれは皇室のために貢献したというよりは、藤原氏に貢献した結果である。六歳で賜姓されていることから、皇女としての意識と藤原氏の一員としての意識のどちらが強かったかはひとえに判断できない。しかし良房と明子のためだけにあるような潔姫の経歴を見ると、彼女に良房をおかえたのは嵯峨天皇その人ではあったものの、以後、父または祖父としての、潔姫や明子に対する天皇の作用は殆どない（注22）。また当時の藤原氏と天皇の力の均衡からしても、やはり「皇女」であるよりは「良房の妻」だったと言えるであろう。

（注1） 本朝皇胤紹運録・皇代記による

（注2） この時の賜姓と当麻氏については皇女総覧（七）

（「瞿麦」第五号／平成九年四月／全姫の項）

に詳述がある）

（注3） 新撰姓氏録・日本紀略・日本後紀による

（注4） 文徳実録による

（注5） 「史艸」第三号（日本女子大学史学研究会・昭和三十七年十一月十五日）

（注6） 「むらさき」七号（平成元年七月）

（注7） 注4に同じ

（注8） 福井俊彦氏の「承和の変についての一考察」

（「日本歴史」第二百六十号・一九七〇年一月）
によれば、嵯峨系官僚と淳和系官僚の対立と見られていいる。

（注9） 注6または『平安王朝の政治と制度』（藤木邦彦著・吉川弘文館発行）の「皇女の降嫁」の章参照。

（注10） 日本紀略・文徳実録・類聚国史による

（注11） 日本紀略・文徳実録・類聚国史による

（注12） 類聚国史による

（注13） 注11に同じ

（注14） 注4および日本紀略による

（注15） 日本紀略による

（注16） 三代実録による

（注17） 日本紀略・三代実録による

（注18） 日本紀略・三代実録による

（注19） 三代実録による

（注20） 日本紀略・三代実録・類聚国史による

（注21） 陽成の退位については

角田文衛『王朝の映像』東京堂出版

一九七〇年刊

松田喜好『伊勢物語攷』笠間書院

一九八九年刊

後藤祥子「二条后物語の成立」

『日本文学』四〇号

を参照した。

（注22） 注5に同じ

（大口 敦子）

●史料

※本文は文末に挙げた最初の史料名のものに拠った。

【大宅内親王】母、橘常子（嶋田麻呂女）／

最終位、三品（不定）

母従三位橘常子。島田丸女（頭注）又云、嘉祥二年二月己亥、无品大宅内親王薨、桓武天皇第八皇女也。〔本朝皇胤

紹運錄]

皇女。大宅内親王。〔皇代記〕

801 (延暦二十年十一月) 丁卯 (ヤ九)。茨田親王冠。贈皇后 (ヤ正子) 今上后。高津大宅内親王加笄。〔日本紀略〕〔類聚国史〕

809 (大同四年七月) 庚戌 (ヤ六)。大宅内親王第^八。〔日本紀略〕〔類聚国史〕

812 (弘仁三年五月) 癸未 (ヤ廿六)。妃四品大宅内親王辭職。許之。〔日本後紀〕〔日本紀略〕〔類聚国史〕

817 (弘仁八年) 八月戊午朔。散事從三位橘朝臣常子薨。左大臣正一位橘諸兄之曾孫。正五位下兵部大輔嶋田磨之女也。皇統彌照天皇 (ヤ桓武) 納之後宮有寵。生三品大宅内親王。宮車晏駕。出家爲尼。薨時年^廿。〔日本紀略〕〔類聚国史〕

828 (天長五年十一月) 丁未 (ヤ廿五) 三品大宅内親王出家入道。〔日本紀略〕

(ヤ桓武皇女) 三品。〔統日本後紀〕

874 (貞觀十六年二月) 三日癸巳。三品賀樂内親王薨云々。天皇不視事三日。桓武天皇子也。〔三代実録〕〔日本紀略〕

【菅原内親王】母、橘御井子 (入居女) / 同母姉妹、賀樂内親王 / 最終位无品

天長二三八薨。母同 (頭注) 紀略、天長二年閏七月丁丑无品菅原内親王薨、桓武天皇第十六皇女。〔本朝皇胤紹運錄〕

皇女。菅原内親王。〔皇代記〕

825 (天長二年閏七月) 丁丑 (ヤ六)。无品菅原内親王薨去。桓武天皇代十六皇女也。〔日本紀略〕

【池上内親王】母、橘田村子 (入居女) / 最終位、无品

貞觀十一十一廿二薨。母同賀樂。〔本朝皇胤紹運錄〕

849 (嘉祥二年二月) 己亥 (ヤ十四)。无品大宅内親王薨。天皇不視事三日。内親王者。桓武天皇第八皇女也。母橘氏。正五位下嶋田磨之女。從三位常子是也。〔統日本後紀〕〔日本紀略〕

【賀樂内親王】母、橘御井子 (入居女) / 同母姉妹、菅原内親王 / 最終位、三品

三品。貞觀十六二薨。母橘御井子。入居女 (頭注) 三代実録、貞觀十六年二月三日、三品賀樂内親王薨。〔本朝皇胤紹運錄〕

皇女。賀樂 (ヤ三品) 内親王。〔皇代記〕

804 (延暦廿三年十月) 癸丑 (ヤ十二)。上御船遊覽。賀樂内親王及參議從三位紀朝臣勝長國造紀直豐成等奉獻。〔日本後紀〕

827 (天長四年) 三月 (ヤ壬戌朔) 己巳 (ヤ八)。授无品賀樂内親王四品。〔日本紀略〕

846 (承和十三年正月) 庚戌 (ヤ八)。授四品賀樂内親王

皇女。池上内親王。〔皇代記〕

平安遺文

869 (貞觀十年貞觀十一年十一月) 廿三日壬子。无品池上内親王薨。天皇不視事三日。内親王者。桓武天皇之女。母橘氏。從四位下入居之女也。名曰田村子。〔三代実録〕〔日本紀略〕

【源潔姫】母、当麻氏 / 同母姉妹、全姫 / 最終位、正三位 (贈正一位)

正三位忠仁公室。染殿后母。母當麻氏 (頭注) 文德實録、齊衡三年六月丙申、正三位源朝臣潔姫薨 (本朝皇胤紹運錄)

賜姓 (女) 潔姫。〔皇代記〕

源朝臣に起り、新田部宿称に尽る。 / 二氏なり。 / 源朝臣。源朝臣信。年は六。弟源朝臣弘。年は四。弟源朝臣常。年は四。弟源朝臣明。年は二。妹源朝臣貞姫。年は六。妹源朝臣潔姫。年は六。妹源朝臣全姫。年は四。妹源朝臣善姫。

年は二。信等八人は、是れ今上の親王なり。而して弘仁五年五月八日の勅に依り姓を賜ひ、左京一条一坊に貫す。即ち信を以て戸主と爲す。〔新撰姓氏錄〕

813 (弘仁六年六月) 戊午 (729)。皇子源朝臣信。弟弘。常。明。女貞姫。潔姫。全姫。善姫等八人。右京人從四位下良岑朝臣安世。從五位下長岡朝臣岡成等貫附左京。〔日本後紀〕〔日本紀略〕

841 (承和八年十一月) 丁巳 (731)。无位源朝臣潔姫正四位下。〔続日本後紀〕

851 (仁寿元年十一月) 乙亥 (737)。進右大臣藤原朝臣良房階正二位。加其家夫人正四位下源朝臣潔姫從三位。〔文德実録〕〔日本紀略〕〔類聚国史〕

853 (仁寿三年) 三月 (738辛卯朔) 甲午 (734)。加從三位源朝臣潔姫正三位。授正六位下難波連藤原良房外從五位下。緣去月遊賞右大臣第而恩及家人也。〔文德実録〕〔日本紀略〕〔類聚国史〕

856 (齊衡三年六月) 丙申 (735)。正三位源朝臣潔姫薨。潔姫者。嵯峨太上天皇之女也。母當麻氏。天皇選

聿未得其人。太政大臣正一位藤原朝臣良房弱冠之時。天皇悅其風操超倫。殊勅嫁之。清和皇太后 (741明子) 即其長女也。潔姫性能琵琶。頗可賞翫。承和八年十一月正四位下。仁寿元年十一月叙從三位。三年三月叙正三位。薨時・擇賀樂岡 (741カラ) (廣) 白川地而為葬地。〔文德実録〕〔日本紀略〕

858 (天安二年十一月) 廿六日癸未。贈故正三位源朝臣潔姫正一位。遣從四位上行越中守源朝臣啓於神樂岡冢。告以贈位。是帝之外祖母也。〔三代実録〕〔日本紀略〕

858 (天安二年十二月) 九日丙申。詔定十陵四墓可獻年終荷前之幣。一略一。贈正一位源朝臣潔姫愛宕墓在山城國愛宕郡。〔三代実録〕

859 (貞觀元年五月) 十五日庚午。下知山城國。充贈正一位源朝臣潔姫墓守冢一戸。〔三代実録〕〔日本紀略〕

863 (貞觀五年三月) 十五日丁丑。帝外祖母源氏 (741潔姫) 墓。在山城國愛宕郡。詔以兆域地四町為四履之限。〔三代実録〕〔日本紀略〕

869 (貞觀十一年十一月) 七日庚寅。從四位下行伊豫權守

當麻真人清雄卒。清雄者。左京人也。祖從五位下吉嶋父正六位上治田麿。清雄之姉為嵯峨天皇之幸姫。生源朝臣潔姫。全姫二皇女。潔姫。是太政大臣忠仁公之室也。生太皇太后 (741明子)。一略一〔三代実録〕

877 (元慶元年十二月) 十三日己卯。勅定每年獻荷前幣五墓。贈太政大臣藤原氏 (741鎌足) 多武岑墓在大和國。贈正一位源氏 (741潔姫) 墓。太政大臣贈正一位藤原氏 (741良房) 墓並在山城國愛宕郡。贈左大臣藤原氏 (741長良) 墓在山城國宇治郡。贈正一位藤原氏 (741長良妻) 墓在山城國紀伊郡。自餘皆停廢焉。〔三代実録〕

882 (元慶六年正月) 廿五日戊辰。尚侍正二位源朝臣全姫薨。全姫者嵯峨太上天皇之女也。母當麻氏。与潔姫同産。全姫云々。〔三代実録〕

884 (元慶八年十二月) 廿日丙午。定每年獻荷前幣十陵五墓。近江宮御宇 (741天智) 天皇山階山陵在山城國宇治郡。平城宮御宇 (741光仁) 天皇後田原山陵在大和國添上郡。桓武天皇柏原山陵在山城國紀伊郡。贈太皇太后藤原氏 (741乙牟漏) 長岡山陵在山城國乙訓郡。崇道 (741早良) 天皇八嶋山陵在大和國添上郡。平城太上天皇楊梅山陵在大和國添上郡。仁明天皇深草山陵在山城

國紀伊郡。文德天皇田邑山陵在山城國葛野郡。太皇太后藤原氏 (741明子) 後山階山陵在山城國宇治郡。贈皇太后藤原氏 (741澤子) 鳥戶山陵在山城國愛宕郡。贈太政大臣正一位藤原朝臣 (741鎌足) 多武岑墓在大和國十市郡。贈太政大臣正一位藤原朝臣 (741長良) 鳥戶山陵在山城國宇治郡。贈正一位藤原氏 (741長良妻) 墓在山城國紀伊郡。贈太政大臣正一位藤原朝臣 (741總?) 墓在山城國愛宕郡。贈正一位藤原氏 (741數子) 墓在同郡。停廢田原 (741施基) 天皇山陵。太皇太后考太政大臣贈正一位藤原朝臣 (741良房) 墓。妣贈正一位源氏 (741潔姫) 兩墓。不預別貢荷前幣。〔三代実録〕〔日本紀略〕〔類聚国史〕

皇女總覽

- (一) 桓武皇女總論・朝原・伊都内親王 (『国文目白』三十三号/平成六年一月)
- (二) 高志・高津・甘南備・駿河内親王 (『国文目白』三十四号/平成七年二月)
- (三) 平城皇女總論 (『瞿麦』第二号/平成七年十月)
- (四) 嵯峨皇女總論・紫子・宗子内親王 (『瞿麦』第三号/平成八年四月)
- (五) 因幡・安濃・正子内親王 (『瞿麦』第四号/平成八年十二月)
- (六) 有智子内親王 (『国文目白』三十六号/平成九年二月)
- (七) 源全姫 (『瞿麦』第五号/平成九年四月)